

# 地域と大学が連携した地域づくり

## — 香川大学経済学部の取り組み —

香川大学 経済学部 教授 古川 尚幸



### 1 はじめに

少子高齢化や人口減少といった社会構造の大きな変化のもと、地域活性化や地方創生が叫ばれて久しい。これらの社会構造の変化や、そこから派生する様々な社会問題への対応は、これからの日本が抱える課題であり、地方における人口減少や、地方のなかでも特に離島や中山間地での人口減少による過疎化は早急に取り組むべき問題である。この離島や中山間地で見られる過疎化の問題は、いずれ日本の各地域でも起こり得ることであり、日本の将来の姿を表した縮図とも言うことができる。したがって、いま離島や中山間地において取り組まれている地域活性化の動きは、これからの日本の各地域が取り組むことになるであろう地域活性化策の先事例となり得る。

他方、大学を取り巻く社会環境に目を向けると、ここでも大きな変化がみられる。地方創生の号令のもと、これまでの大学における評価基準の2本柱であった「研究」と「教育」に、新たに「地域貢献」が加わり、「研究」、「教育」、「地域貢献」の3本柱へと評価基準が変化している。この大きな変化のキッカケとなった転機として、次の2つをあげることができる。

ひとつは、経済産業省（2006）で示されたように、社会人基礎力に関する研究会が中間とりまとめとして示した「社会人基礎力」である。この中間取りまとめによると、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力と12の能力要素をあげている。特に大学教育では、社会人基礎力の育成について、「より多様な若者が参加するようになってきており、大学における社会人基礎力の育成について、改めて意識的な取り組みが必要となってきてい

る」と指摘している。

もうひとつは、文部科学省（2015）で示されている「地域貢献」である。これまで大学に対する評価は、すでに述べたように、主に「研究」と「教育」の2本柱であったが、昨今、文部科学省が示した「国立大学経営力戦略」によると、3本目の柱として「地域貢献」が明記された。簡単に整理すると、全国86国立大学が、①地域活性化の中核拠点となりうる大学、②特定分野で世界的な教育研究の拠点となりうる大学、③世界最高水準の教育研究の拠点となりうる大学、の3つに分類されることになった。つまり、大学、特に地方大学では、その新たな役割として、地域活性化や地域づくりを担う人材の養成が求められることとなった。

香川大学経済学部では、大学を取り巻くこの社会環境が大きく変化する以前から、学生が主体となった地域づくりに取り組み始めたが、この大きな社会環境の変化が、大学内において、さらに地域づくりを後押しすることにつながっている。

以下では、香川大学経済学部における学生が主体となった学生プロジェクトについて、特に、私が指導しているプロジェクトの取り組みを事例として取り上げ、その概要とそこから得られた知見について述べる。

まずは本題に入る前に、その前提となる、本学部における「地域と大学が連携した地域づくり」のための教育体制ならびに支援体制についての説明から始めたい。

### 2 香川大学経済学部における教育体制

香川大学経済学部では、学生のニーズや地域社会からの期待に鑑み、2018年度入学生より、これまでの3学科体制から1学科5コース制に変更し、経済学や経営学の基礎的な知識を養成しつつ、より専門的な学問分野の

研究に学生が取り組むことができるよう制度変更を行った(図1)。この制度変更のなかで、本学部では、新たに「観光・地域振興コース」を設置し、経済学や経営学をベースとした地域づくりについて、学生が実践的に学ぶことができる体制を整備している。

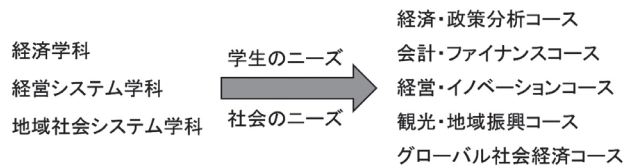


図1 香川大学経済学部の教育体制の変化  
(2018年度入学生から)

### 3 香川大学経済学部における支援体制

香川大学経済学部では、前述の教育体制のみならず、地域で活動する学生たちを支援するために、2010年度から「経済学部学生チャレンジプロジェクト」(通称、学チャレ)を設けている。この学チャレでは、教員から構成された審査委員会に対して、申請した学生たちが自らプレゼンテーションを行い、採択されると1件につき10万円を上限として、審査委員会が査定した金額の支援を受けることができる。ただし、この経済的支援については、大学予算からの支援であるため、支出できる費目に様々な条件があり、その予算執行にあたっては、プロジェクトの活動項目の変更に対応した大幅な変更が認められていないなど、やや使い勝手がよくないという難点もある。

### 4 古川研究室におけるプロジェクト創出手法

1995年4月に香川大学経済学部に着任した私は、着任当初、関義雄経済学部教授(当時)と共同して、商品学を中心に、環境問題やエネルギー問題を扱う商品学研究室を担当していた。地域づくりに携わるようになったのは、着任後10年を過ぎた2005年10月に、当時のゼミ生たちと始めた「香川大学直島地域活性化プロジェクト」がキッカケであった。その後、研究室が取り扱うテーマとして、経営システム学科のなかで「商品」、「環境」、「地域」の3つを掲げてきたが、2018年度からは、制度変更により「観光・地域振興コース」を主に担当する研究室として、地域づくりに取り組んでいる。

古川研究室では、直島地域活性化プロジェクトがそうであったように、地域課題に対して研究室内のプロジェクトから地域での取り組みを開始して、人的にも経済的にもプロジェクトとして自走できる目途がたった時点で、学部や学年に関係なく様々な学生たちが携わることができるよう、研究室から独立した学生プロジェクトにシフトさせている。2019年度は、研究室内プロジェクトとして、香川県ならびに岡山県の7地域でプロジェクトを展開しており、これらも自走の目途がたてば、独立させる予定である。ただし、様々な理由により、これまでに目途がたたないまま撤退する研究室内プロジェクトもあれば、独立したあとに撤退を余儀なくされた学生プロジェクトが存在したことは隠す必要もない事実である。

### 5 学生プロジェクトの意義

プロジェクトの詳細について述べる前に、学生プロジェクトの意義について触れておきたい。学生プロジェクトの目的について、直島地域活性化プロジェクトを開始した当初は、プロジェクトに携わる学生たちはもちろん、担当教員である私も、「地域活性化」に重点をおいて活動を行ってきた。しかし、直島地域活性化プロジェクト設立以来、長きにわたり活動をするなかで、教員である私のみならず、プロジェクトに携わる学生たちも、プロジェクト活動を通じて、地域課題の解決や地域活性化を目指すことに変わりないが、学生たちが主体となるプロジェクトであるからには、それ以上に携わる「学生の成長」が、プロジェクトにとって大切なキーとなるコンセプトであると考えに至った。この「学生の成長」こそが、大学として学生プロジェクトに取り組む意義であり、時間という大切な資源を費やしなが学生たちがプロジェクトに携わる意義である。その副産物として、学生プロジェクトの成果が地域活性化の一助となり、地域づくりに貢献できるのであれば、地域にとっても学生プロジェクトは大いに意義があるものと言える。

### 6 学生プロジェクトの概要

ここでは、古川研究室が起点となり創出してきた学生プロジェクトで、継続的に活動しているプロジェクトについて、それぞれ詳細を述べたい。いずれのプロジェクト

とも共通して、次の3つをプロジェクトの目標としている。

- ① 実践的な経営体験  
座学では得ることのできない実学を身につける
- ② 人間力の向上  
経営体験や地域活動を通じて人間力を身につける
- ③ 地域活性化への貢献  
地元住民・企業・自治体と協力し地域活性化に貢献する

#### (1) 直島地域活性化プロジェクト

直島地域活性化プロジェクトは、2005年10月から直島（香川県直島町）において、古川研究室に所属する学生たちが主体となり、直島町役場や直島文化村、直島の住民団体「ういらぶなおしま」の協力を得ながら、地域活性化の一翼を担うことを目的としてスタートしたものである。2006年8月からはカフェ「和cafe ぐう」を開業し、現在まで、このカフェを拠点として、様々な地域づくりに向けた活動に取り組んできた（写真1）。直島プロジェクトの基盤となるカフェ「和cafe ぐう」は、毎週土日祝日の11:00~17:00まで営業しており、年末年始を除いて、一年を通じて営業している。開店以来、毎年約5,000名のお客様にご利用いただき、延べ60,000名を超えるお客様にご利用いただいている。

直島地域活性化プロジェクトでは、プロジェクト設立以降、カフェ「和cafe ぐう」の経営を中心に、徐々にその活動範囲が拡がりつつあるが、大きく分けると、以下の5点を中心に取り組んでいる。

- ① カフェ運営を通じた環境問題への取り組み



写真1 和cafe ぐうの外観

- ② カフェ運営を通じた地産地消への取り組み
- ③ 観光ボランティアガイドの実施
- ④ 地域イベントの企画・参加
- ⑤ 他大学との交流

これらのなかでも、観光ボランティアガイドは、これまで休止状態にあった観光ボランティアガイドの会（NPO直島町観光協会のもとにある組織）を、2018年11月から、NPO直島町観光協会のもと、学生たちにより復活させようとする取り組みである。観光ボランティアガイド経験者やNPO直島町観光協会の協力のもと、ガイドの実施に向けた座学による研修や実地での研修を行い、直島地域活性化プロジェクトが中心となって復活するに至った。

#### (2) 小豆島SAKATEプロジェクト

小豆島SAKATEプロジェクトは、2012年10月から小豆島坂手地区（香川県小豆島町）において、古川研究室に所属する学生たちが主体となり、地域活性化の一翼を担うことを目的としてスタートした。2013年3月からは、小豆島SAKATEプロジェクトとしてプロジェクトメンバーをゼミに閉じることなく全学に拡げて活動を拡大してきた。当初の活動の中心となったのは、長年にわたり地域で愛されながらも閉店状態にあったカフェ「喫茶白鳥」を復活することであった。実際に、この喫茶白鳥をコミュニティカフェと位置づけ、喫茶白鳥を学生たちの手で復活させ、プロジェクトの拠点として2016年11月まで喫茶白鳥を運営し、その間、様々な地域活性化に向けた活動に取り組んできた（写真2）。2016年11月からは諸事情により喫茶白鳥の営業を休止してい



写真2 喫茶白鳥の外観（2013年開店当時）

るが、以下で述べる様々な活動を継続しながら、現在では喫茶白鳥復活に向けた取り組みも行っている。

小豆島SAKATEプロジェクトでは、喫茶白鳥の復活のほかに、現在、以下の5点を中心に取り組んでいる。

- ① 地域フリーペーパー「白鳥だより」の発行
- ② 夏季限定「海の家だいい家」の運営
- ③ 坂手地区の在来種「徳本あんず」の栽培
- ④ 坂手地区の清掃活動
- ⑤ 地域イベントの企画・参加

これらのなかでも、地域フリーペーパー「白鳥だより」は、学生たちの手で分担して毎月発行し、坂手地区の一軒一軒に手渡しで配布しており、地域住民とのコミュニケーションの醸成だけでなく、月1回ではあるが地域の高齢者の見守りの役割も果たしている。

### (3) Bonsai☆Girls Project

Bonsai☆Girls Projectは、2012年12月から、古川研究室に所属する女子学生たちが主体となり、鬼無植木盆栽センターや高松市役所、花澤登人氏（花澤明春園 園主）の協力を得ながら、地場産業の発展の一翼を担うことを目的としてスタートしたものである。香川県高松市は松盆栽の全国シェアの約80%を占める大きな産地であるが、そのことはあまり知られていない。また、盆栽に対する一般的なイメージは、主に「男性の世界」、「高齢者の趣味」、「高価である」の3つであり、一部の愛好家が嗜むものとして固定化されている。このような状況のもと、それぞれ「男性」に対して「女性」、「高齢者」に対して「若者」、「高価」に対して「比較的安価」という正反対のイメージを満たす存在として、「盆栽を嗜む女子大学生」をコンセプトにプロジェクトを結成し、高松盆栽の知名度向上に向けた取り組みを展開している（写真3）。

Bonsai☆Girls Projectでは、現在、以下の3点を中心に取り組んでいる。

- ① 盆栽に関する知識や技術の習得
- ② 盆栽ワークショップを通じての普及啓発
- ③ 盆栽についてSNSを活用した情報発信

これらのなかでも、盆栽についてSNSを活用した情報発信では、TwitterやFacebook、InstagramなどSNSを活用して、高松盆栽に関する情報発信やプロジェクト



写真3 盆栽づくりワークショップ

の活動に関する情報発信を行っている。特にInstagramではフォロワーが12,000件を超え（2019年8月1日現在）、日本国内のみならず海外からのフォローが非常に多く、盆栽に対する海外からの注目の高さを表していると言える。

### (4) さかいで沙弥島プロジェクト

さかいで沙弥島プロジェクトは、2013年5月から、瀬戸大橋の開通を記念して建設された地域ミュージアムである瀬戸大橋記念館（香川県坂出市）において、香川大学生が主体となり、公益財団法人瀬戸大橋記念公園管理協会や坂出市役所、坂出商店街の協力を得ながら、地域活性化の一翼を担うことを目的としてスタートしたものである。2013年10月からはカフェ「Hashicafe」を開業し、現在まで、このカフェを拠点として、様々な地域づくりに向けた活動に取り組んできた。さかいで沙弥島プロジェクトの基盤となるカフェ「Hashicafe」は、毎週土日祝日の9:00~16:00まで営業しており、年末年始を除いて、一年を通じて営業している。

さかいで沙弥島プロジェクトでは、カフェ「Hashicafe」の運営のほかに、現在、以下の2点を中心に取り組んでいる。

- ① 瀬戸大橋記念館のイベントの企画・運営
- ② 坂出商店街でのイベントの参加

これらのなかでも、瀬戸大橋記念館のイベントでは、これまでに「流しうどん」の企画・運営や、Tシャツアートイベントの企画・運営など、瀬戸大橋記念館の認知度向上と来場客増加のために、継続的な活動を展開している（写真4）。



写真4 流しうどんイベント

### (5) KAGAWA Maker

KAGAWA Makerは、2017年4月から、「香川の銘菓（メイカ）を“つくる”、香川の地域ブランドを“つくる”、香川の未来を“つくる”」をコンセプトに、香川大学生が主体となり、高松商工会議所や地域の菓子店、和三盆糖の型抜きワークショップを日本国内のみならず海外でも積極的に開催している上原あゆみ氏（屋号：豆花）の協力を得ながら、地域経済の発展の一翼を担うことを目的としてスタートしたものである。

KAGAWA Makerでは、現在、以下の3点を中心に取り組んでいる。

- ① 地域の菓子店と地域資源を活用した商品開発
- ② 地域の菓子店に関する情報発信
- ③ 菓子木型を活用したワークショップ

これらのなかでも、菓子木型を活用したワークショップでは、香川県伝統的工芸品にも指定されている「菓子木型」を用いて、香川県の特産品である「和三盆糖」の型抜き体験を行うワークショップを展開している（写真5）。



写真5 菓子木型を用いた型抜きワークショップ

### (6) 島唄プロジェクト

島唄プロジェクトは、2017年3月から、本学部学生である大学生シンガーソングライターSHY（SHYはアーティスト名である）との出会いからスタートしたもので、それまで私のなかでアイデアとして温めていた「瀬戸内海の島々の歌をつくる」ことにSHYが取り組むこととなった。島唄プロジェクトのテーマである瀬戸内海の島々は、それぞれ異なった歴史や文化を持ち、それぞれ異なった魅力を有している。SHYが自ら作詞作曲した「島唄」を通じて、島外に住む人々だけでなく、その島内に住む人々にも島々の魅力を感じてもらおうことが、このプロジェクトの目的である。現在では、直島をはじめとする瀬戸内海の島々の歌が完成しており、香川県のみならず県外でも地域の音楽イベントに出演し、島々の魅力を伝えている（写真6）。



写真6 音楽イベントへの出演

### (7) 学生ESDプロジェクトSteeP

学生ESDプロジェクトSteePは、2017年5月から、香川大学における環境問題をテーマとした初めての学生団体として設立した。このプロジェクトは、古川研究室で定期的に行っていた食品ロス削減イベント「ともにキッチン」を引き継ぐ形でスタートしたものである。

学生ESDプロジェクトSteePでは、現在、以下の6点を中心に取り組んでいる。

- ① 食品ロス削減イベント「ともにキッチン」開催
- ② 香川県学生地球温暖化防止活動推進員として地域イベントに出展
- ③ 香川大学環境報告書の制作協力
- ④ 自治体からの啓発冊子の制作委託

- ⑤ エコツアーの企画・運営
- ⑥ 地域の小学校での出前授業（写真7）

これらのなかでも、香川県学生地球温暖化防止活動推進員としての活動では、香川県地球温暖化防止活動推進センターならびに香川県環境森林部環境政策課から「香川県学生地球温暖化防止活動推進員」として認定された学生メンバーが、地域で開催される様々な環境イベントに出展し、環境問題について啓発活動に取り組んでいる。



写真7 小学校での出前講座

## 7 これまでに得られた知見

これまでに述べてきた学生プロジェクトから得られた知見について、その成功に向けた共通するポイントとして、以下の3点をあげることができる。

- ① 学生主体の取り組みであること
- ② 自主財源を生み出すシステムをもつこと
- ③ 得られた知識を伝承するシステムをもつこと

まず、学生主体の取り組みであることについて、これらの学生プロジェクトは授業ではなく正課外活動であり、学生は活動を通じて単位を得ることはない。また、プロジェクト運営上の意思決定は学生たちによる合議制で行われるため、あくまでも教員はアドバイスを与える程度である。学生たちは自らPDCAサイクルに則り活動を行っているため、学生個人としても、プロジェクトという組織としても、知識や経験の蓄積が可能となり、成長につながる。

つぎに、自主財源を生み出すシステムについて、プロジェクト運営にかかる経費（例えば、仕入れ代金、交通費、イベント経費など）は、カフェ運営やワークショップ

参加費、委託費など、学生が自らの活動を通じて稼いだ資金により賄っている。ここで得た資金は、学生たちに配分されることはなく、すべてプロジェクト運営のための経費として使われる。したがって、大学からの経済的な支援がなくても、最低限の活動を維持・継続することができる。このことから、自主財源を生み出すことは、学生プロジェクトの継続にとって大切な要素である。この点については、学生プロジェクトだけでなく、一般的に、各地で取り組まれている地域づくりにとっても大切な要素である。

最後に、得られた知識を伝承するシステムについて、各プロジェクトでは、学生リーダーを中心に、役割分担をしながら活動している。これらの活動を通じて、知識や経験、スキルなど、活動に必要なノウハウを、先輩が後輩に伝え指導する体制が整っており、速やかに途切れることなく世代交代を行うことができる。

紙面の制約から、学生プロジェクトについて、それぞれ簡単に述べてきた。一部のプロジェクトについては、すでに学会や論文を通じて報告しているので、詳細はそちらを参考にさせていただきたい。また、まだ報告していないプロジェクトについては、その詳細を別の機会に譲りたい。

## 8 おわりに

これまで述べてきた学生プロジェクトは、「学生の成長」を促すという点で、有効な手法のひとつとすることができるが、「教育」や「地域づくり」という点で、改善すべき課題が多く残っている。これからも様々な地域やテーマで、地域の皆さんや学生たちとプロジェクトに取り組んでいきたい。

最後に、本稿の執筆の機会を与えていただいた公益財団法人えひめ地域政策研究センターに深く感謝するとともに、日ごろから各地域で活動に励むプロジェクトの学生たちを称え、時には温かく、時には厳しく学生を見守っていただいている地域の皆さまに感謝の意を表したい。

## 【参考文献】

- 経済産業省 社会人基礎力に関する研究会（2006）「社会人基礎力 中間取りまとめ」2006年1月20日
- 古川尚幸（2018）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学 Bonsai ☆ Girls Project を事例として～」『地域活性学会第10回研究大会論文集』146-149頁
- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学直島地域活性化プロジェクトを事例として～」『地域活性研究』10巻, 127-134頁
- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学小豆島 SAKATE プロジェクトを事例として～」『瀬戸内海』77号, 55-57頁
- 古川尚幸（2019）「地域資源を活用した大学生による商品開発～KAGAWA Maker を事例として～」『日本商品学会第70回全国大会要旨集』13-15頁
- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～KAGAWA Maker を事例として～」『地域活性学会第11回研究大会論文集』103-106頁
- 文部科学省（2015）「国立大学経営力戦略」2015年6月16日

## Profile 古川 尚幸（ふるかわ なおゆき）

---

香川大学経済学部 教授（商品学）

## 経歴

- 1969年 香川県坂出市出身
- 1994年3月 大阪府立大学大学院工学研究科博士前期課程 修了
- 1995年3月 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程 途中退学
- 1995年4月 香川大学経済学部 助手
- 2011年4月 香川大学経済学部 教授 現在に至る

## 最近の業績

- 古川尚幸（2018）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学 Bonsai ☆ Girls Project を事例として～」『地域活性学会第10回研究大会論文集』146-149頁
- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学直島地域活性化プロジェクトを事例として～」『地域活性研究』10巻, 127-134頁
- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～香川大学小豆島 SAKATE プロジェクトを事例として～」『瀬戸内海』77号, 55-57頁
- 古川尚幸（2019）「地域資源を活用した大学生による商品開発～KAGAWA Maker を事例として～」『日本商品学会第70回全国大会要旨集』13-15頁
- 古川尚幸（2019）「地域と大学が連携した地域づくり～KAGAWA Maker を事例として～」『地域活性学会第11回研究大会論文集』103-106頁
-